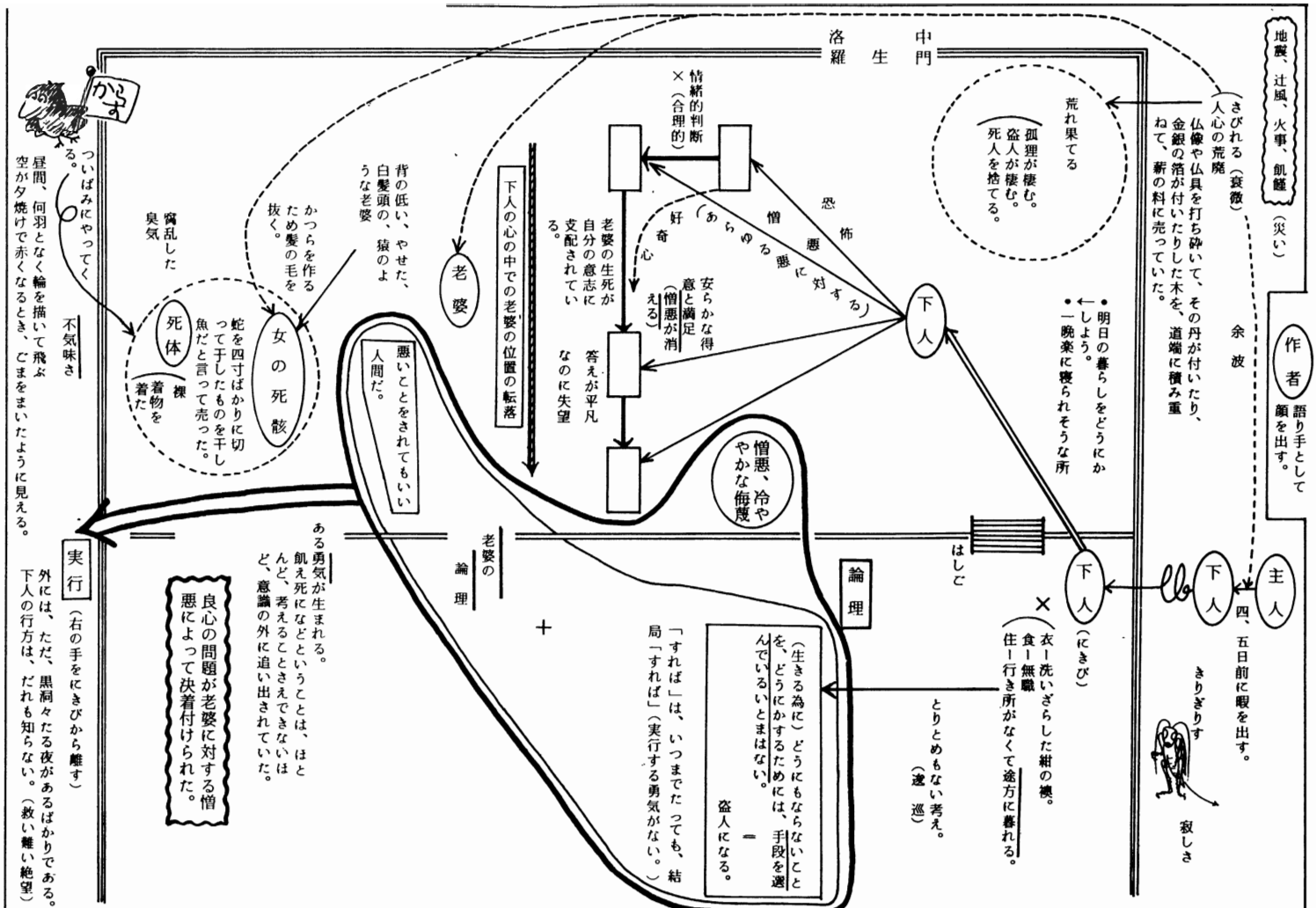
# 羅生門

芥川龍之介


地震、辻風、火事、飢饉
（災い）
作者
語り手として顔を出す。
（さびれる（衰微））
人心の荒廃
仏像や仏具を打ち砕いて、その丹が付いたり、金銀の箔が付いたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていた。
余波
荒れ果てる
孤狸が棲む。
盗人が棲む。
死人を焼てる。
中門
洛生門
情緒的判断
×（合理的）
恐怖
憎悪
（あらゆる悪に対する）
好奇心
老婆の生死が自分の意志に支配されている。
安らかな得意と満足
（憎悪が消える）
答えが平凡なのに失望
下人の心の中での老婆の位置の転落
老婆
下人
●明日の暮らしをどうにか
←しよう。
●一晩楽に寝られそうな所
主人
下人
下人
（にきび）
四、五日前に暇を出す。
きりぎりす
寂しさ
×
衣ー洗いざらした紺の襖。
食ー無職
住ー行き所がなくて途方に暮れる。
とりとめもない考え。
（逡巡）
はしご
論理
（生きる為に）どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選んでいるいとまはない。
＝
盗人になる。
「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」（実行する勇気がない。）
老婆の論理
憎悪、冷やかな侮蔑
悪いことをされてもいい人間だ。
背の低い、やせた、白髪頭の、猿のような老婆
かつらを作るため髪の毛を抜く。
女の死骸
蛇を四寸ばかりに切って干したものを干し魚だと言って売った。
死体
裸
着物を着た
腐乱した臭気
ついばみにやってくる。
不気味さ
かるす
昼間、何羽となく輪を描いて飛ぶ空が夕焼けで赤くなるとき、ごまをまいたように見える。
実行
（右の手をにぎびから離す）
外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。
下人の行方は、だれも知らない。（救い難い絶望）
ある勇気が生まれる。
飢え死になどということは、ほとんど、考えることさえできないほど、意識の外に追い出されていた。
良心の問題が老婆に対する憎悪によって決着付けられた。